



TITLE:

# 10月と11月の観測案内

AUTHOR(S):

木邊

---

CITATION:

木邊. 10月と11月の観測案内. 天界 1937, 17(198): 466-469

ISSUE DATE:

1937-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167541>

RIGHT:

## 10月と11月の観測案内

木 邊 生

### (10 月)

“10月” 瑞穂の先も日増に重く、碧空はあくまで高く、10月ほど吾々の好きな月はない。仲秋の名月もさる事乍ら、僕には“すばる”とアルデバランの光が思出深い。もう十年も昔にならうか、星好きになつた頃、憧がれの冬の星座を待ち侘びて、オリエンタルダンスのメロディを口ずさみ乍ら、8倍の双眼鏡を以て、飽かずに眺めたのが此の星々だつた。時は移りて碎かれた双眼鏡は、今は Finder に轉身して、幾多の観測の黙々たる下働きをして居る。あの双眼鏡で、あの時に、あの星の姿は時間と云ふ流れがある以上、再び永遠には見られないが、別な意味で再生はして居る。總てのものは或る Cycle の基に、不思議な道程を繰返へして居るのだろうか？ 否、或る宗教哲學は一刹那に於ける生滅の連續を考へる。亞形の辨證法かも知れない。果して今、此等は世の情勢に何と答へやう？

朝の3時には早稲を刈り込んだ農家の稲扱機の音に、田舎の晩秋は早や目覺める。やはり“すばる”とアルデバランを背負つて……………

“天候、シーイング” 暑くもなく、寒くもない、日常生活にも、又観測にも、快適の気温に、最も能率が上る。但し月末にもなると、大抵1回位は朝霜の降りる日が来る。一つ低氣壓が過ぎれば、相當有力な高氣壓が大陸から移動して内地を蔽ふ。その様子は、4月と似て居るが、可なりゆつくりして居るので、數日の間所謂秋日和が續き、例年なれば都會も田舎も秋祭り、運動競技會、松茸狩り、ハイキングと行樂に暮れやう。

シーイングも高壓下であれば、稀には極度の好シーイングも出會す。とも角此の10月を最後に、シーイングの良い半年は終る。遊星面にも相當よく、又下方まで澄んだ空は、凡ゆる観測に好適だが、ただ一つ嫌なのは無風快晴の夜には降露に弱る。實に10月の露はヒドい。

“太陽” シーイングは9月よりも可なり落ちるが、未だ良い方である。注意を要するのは、太陽面の見掛けの中心が、最も北に偏する時であるから、

黒點の緯度を見誤る危険性が多い事である。

**遊星面** 火星も木星も、もう season off に近い。土星だけが頑張つて居る。充分とは行かないが、10cm 級の器械で相當美しく環が見える。

**恒星界** 夏の星座は尚ほ高く、東から 中天を占める秋の星座は淋しい。昨秋には續けさまに3個の Nova が發見されたが、今年も9月に2個發見された。所が一見すれば銀極に近い位置に出現したのだから、何か異例の事柄を意味する事が知れる。即ち此の新星が Super Nova なのである。

有名なアンドロメダの星霧は巨大な、廣汎な組織を持つた一宇宙とも云ふべきものである事は、諸賢の御承知の所である。此の星霧中には屢々新星が出現する。其等の平均光度は比較的良く揃つて居り、17等級内外である。是れを現在信ぜられて居る（殆んど確實な）距離から算定すれば、絶對光度は-5等級位になり、我々が普通に呼んで居る Nova と大差のない光度である。所が1855年に此のアンドロメダ星霧の中央近くに、7等星の Nova が出現した。(S And) 此の新星は少々疑は残つて居るが、先づ實際に於ても星霧中の新星だとされて居る。そうすると、其の絶對光度は實に-15等と云ふ太陽の1億倍の光輝を放つた事になる。今回の Nova は、この種の超新星だと云ふ電文が到着した。一般に新星の起因に關しては、何等定説と云つてもないが、新星其のものが相當大それた現象である事は間違ひないのだから、Super Nova は更にその1萬倍も大仕掛けの爆發である事は、何としても大事件である。勿論承認されて居る説明ではないが、此れこそ本當に2個の恒星によつて惹起された現象ではないかとも稱へられて居る。相憎く既に西天低く、10月になれば觀測は困難になるが、大いに觀測を期待する。

昨年 <small>の</small> 記録	6 <sup>h</sup>	21 <sup>h</sup>
平均雲量	5.7	6.0
平均氣溫	+12.1°C	+14.0°C
太陽黒點	相對數1日平均	105.0

昨年10月の出來事、3日に射手座新星(4.6等)が、神戸の會員岡林氏により發見された。又19日は、1936年度の鷲座第2新星(7.0等)發見さる。

## (11 月)

“11月” 清楚な菊花に飾られて、晩秋より初冬へと暦は移る。時ならぬ時雨に花山の坂路を悩みつづ、横合から吹き付ける朔風は、とり分け紅葉の木梢に當りが強い。事の終つたものは潔ぎよく振り捨てて、既に其の下には春が用意されて居るか、夫れは問ふのに未だ早い。

観測案内に筆をとつて丁度1年、御約束に背いてトンダ方面に駄筆を走らせ、常に誌面を汚した事を御詫する。然し此の月で一應御別れしやうと思ふと、何故か、やはり離層に隔てられる枯葉にも親しみを覺へる。だが、ヤセ我慢では無く、“有も佳し、又亦も樂し”と、勝手な哲學まがひのものを振り廻して、時たまのボツカリとした小春日和を、永しなへの幸に讃へて次の方にリレしやう。

“天候、シーイング” 氣壓配置はもう冬の型になる。次ぎ次ぎと低氣壓が出來ても、更に後から大陸の高壓部は根強くなつて、10月の様にフワフワと日本へはやつて來なくなる。反對に日本海に出る迄は平凡な小低氣壓が、北海道に近づいてから急に一人前の大陸旋風に發達して、背後に押し迫る季節風は、内地の1000メートル級の山や、北海道に白雪を齎らす。その間どうかすると、所謂小春日和がはさまつて、櫻の1—2輪に御愛嬌を振り播いて呉れる。だが一體に小忙はしく、晴れも曇りも長續きしないから、落着いた観測には不向きである。一番嫌なのは“大丈夫晴れだ”と思ふ夜に、正體の知れない雲がさつと擴り、又消えたりする事である。然し一面から考へると、全く観測不可能の日も尠ない。シーイングの方は例外を除いては先月よりも更に變化する。氣溫も降り、降霜も屢々訪れる様になるから、観測時には防寒が必要となる。

太陽 低い空に居る時が多いので、つい好機を見逃す場合が多い。シーイングの點からでも必ずしも好適ではないが、見られる内に早く見る事が大切だろう。

月 3日が新月に當るが、7日(月齡4.3)位になつてやつと西低く目にとまるだろう。11日に上弦、17日満月になる。21日(月齡18.3)の頃になつて、月

の出が薄明よりも遅くなるから、闇夜の時間が再び出来始める。25日には下弦を過ぎて、12月へ移る。

**遊星面** 水星は月末になると1時間餘り太陽に後れて沈むが、肉眼で探すのにも一骨だろう。

**金星** 曉天に月始めは1時間半、月末には1時間太陽に先行して出るが、外合に近くて見ばえもない。真白い12日月の型状を示すのみだろう。

**火星** 射手座の端ヅツコから、山羊座の中部へ盛んに支那雜軍の如く退却して居るが、所詮は太陽に追付かれよう。然し今の所、 $+0.5 \sim +0.8$  等級の光を放つて居るから、附近では何と云つても一番明るく、未だ暫くは“鳥無き里の蝙蝠”をキメ込んで居る。赤い12日月位の面はもう観測の時期ではないが、強力な器械では縮少した南極冠や大シルチス等は未だまだ相當見られる。

**木星** 火星に追越されて、西天低く巨體をユラユラして見る程もない。然し、小望遠鏡で月始めには衛星の動きも面白く見られる。

**土星** 位置は良いが、10月から亦少し環が細くなつて来るから、11月は期待が出来ない。

**天王星** 上旬に對衝に來る。いつも乍ら 8~10 cm 位の器械に 150~200 倍をウント良いシリングの日に使ふと、小さな圓盤に見えるのが嬉しい。衛星は 25 cm が必要である。

**其他** 海王星と小遊星は特殊の人でないと對象にならぬから省かう。例年乍ら獅子座の流星に氣を引かれるが、昨年のように、10月末~11月始にかけてのオリオン流星の方が盛んかも知れない。流星観測は器械無しで出来る代りに、さてやつて見ると望遠鏡を使用する観測以上に骨が折れる。一人で見ると特にその感が深い。

**恒星界** もうオリオンの中心が東に昇る。冬へのデモンストレーションに、思はず首をすくめない様に。

**昨年(1997)の記録** (11月) 雲 量 氣 温

4.7(6<sup>h</sup>) 6.9(21<sup>h</sup>)  $+5.6^{\circ}\text{C}$ (6<sup>h</sup>)  $+8.8^{\circ}\text{C}$ (21<sup>h</sup>)

太陽黒點相對製平均 133.2 観測日數 22日